

祠のある磐座を中心にした温泉付き集会所

1110354 松木 俊之

高知工科大学 工学部 社会システム工学科

神母ノ木は、段丘下に川が流れ、その上に住宅地があり、一番上にお墓と祠がある天へと通づる空間の三層構成になっている。このことから神母ノ木は古くから「かみ」の存在と共に暮らしを形作って来たのではなかろうかと推察できる。しかし、現在は過疎化や高齢化の進む場所や、新規の住宅が乱立する場当たりな雰囲気が神母ノ木の秩序を乱しつつある。そこで、かつての神母ノ木の特質を持ちつつも現代の神母ノ木に対応する形として整備し、住民の集まれるコミュニティ施設を祠を中心にして設置する。こうすることで神母ノ木ならではの集会所が出来ると思われる。

再び「かみ」を中心とした精神的な深みを持ち、強い絆によって結ばれた地域の再生、創生を目指す。

Key Words : 地形、境界、コミュニティ、コスモロジー

1. 背景と目的

計画する敷地は神母ノ木である。神母ノ木は高知県香美市にある物部川畔の街道沿いの町である。この神母ノ木地区は、河岸段丘に位置した地区で、段丘下に自然豊かな物部川が流れている。その上に住宅地があり、一番上の土地には緑豊かな畑の広がる場所があり、お墓や祠が数多く存在する場所、「聖所」の順序で構成されて来たことと推察できる。本計画では、人と聖所の境界にある磐座の上に乗った祠のある敷地に注目した。現況では、この敷地は祠と畑と住宅が入り交じった敷地となっている。

現在の神母ノ木地区は過疎化や高齢化の進んだ地区がある。一方では、新規の住宅が乱立する地区があるなど、場当たりな雰囲気が原因で秩序が乱れつつある。昔の神母ノ木地区が“人”と“聖所”がはっきり分かれていたように、この祠のある敷地も分かれているべきではないか。それは実際に、いつの時代にどのような「かみ」が存在したのかは不明であるが、神母ノ木地域には、具体性の強い「かみ」の存在が感じられる。人間世界に対する「神」であったり、人々の時間的な「かみ」すなわち祖先であったり、古い時代の身分的な上位者としての「かみ」であったりと、様々に想像される。そして、その土地の使い方や古くからの地名、伝統芸能などに「かみ」を敬い「かみ」に仕える人々の姿が、神母ノ木の人々の暮らしを形作ってきたのではなかろうか。再度この地域本来の暮らしを体験できる施設、磐座祠を中心とした集会所として構築し、「かみ」を中心とした地域の伝統や歴史に裏打ちされた精神的な深みを持つ、強い絆によって結ばれた地域の再生、創生を目指していきたい。

よって、本来の神母ノ木の性質を際立たせるような、住民の為の集会所を併設する。祠を壁で取り囲み、祠と集会所へ行けるそれぞれの動線を造り、人と聖所を分ける。

2. 敷地とその選定理由

当計画の敷地は、神母ノ木地区の鏡橋を渡り、龍河洞タクシーの脇の細い路地を上がっていった先に四叉路があり、その角に磐座の上に祠が飾ってある一角がある。

この敷地は祠と畑と住宅が入り交じっており、本来の神母ノ木の地形の規則に逸脱した空間になっている。人と聖所が別れていた以前の神母ノ木のように、この祠のある敷地も本来の元の形の様に戻るのが望ましい。しかしすでにこの場所で暮らしている住民を転居させて元に戻す事は難しい。そこで、住民が移動する事なく人と聖所を区別する建築物を提案したい。



図1 敷地周辺図 s= 1/12,500



3. 設計趣旨

本設計趣旨では、以下の3点を指針にすえて総合的な計画を行う。

3-1. 地形とコスモロジーの表現

神母ノ木地区の地形は、河岸段丘の下から自然（川など）・人（住宅）・聖所（お墓・祠）といった、順序で構成されており、この敷地は聖所と人との間に位置しているといえる。聖所側を盛り土で覆い、人側を切妻造りの屋根で設計し、この境界を際立たせ、神母ノ木の「かみ」を中心とした世界観を合わさることで、今後神母ノ木が繁栄するような提案をする。

3-2. 祠を中核にすえて

現況のあり方を変え、祠にあえて囲いを設けることで、「人」とこの土地の「かみ」の違いを際立たせる提案をする。

3-3. コミュニティーと集会所

現在の神母ノ木は集会所がなく、隣の地区の片地地区の集会所を借りている。しかし、神母ノ木の世界観を再度住民が思い返す為には、神母ノ木の内部に神母ノ木ならではの集会所を造るべきである。祠と一帯になっていて、祠の神聖さを損なわず、尚かつこの神母ノ木地区に住んでいる人々が日々使いやすい集会所兼コミュニケーション施設を提案する。

4. 集会所の構成

本計画では、以下の5点を指針にすえて集会所を構成する。

4-1. 聖所の場所と人間の場所の創出(図2)

神母ノ木地区の地形は、河岸段丘の下から自然（川など）・人（住宅）・聖所（お墓・祠・原っぱ）といった、順序で構成されている。よって本敷地の建物の外観を聖所（お墓・祠）側は盛り土、人（住宅）側を従来の住宅の屋根と同様切妻造りとする。そのことで、神母ノ木の特徴ある風景を創出する。

4-2. 盛り土の切りかき(図2)

聖所空間に盛り土を設けるのだが、その盛り土によって現在の住宅を壊さず制作する。よって、民家の手前で盛り土を切断し、そこの切断し、結果あらわれる側面には神母ノ木でよく使われている石垣にて表現する。

4-3. 南北のライン(図3)

集会所の2階部分は南北に対し細長く、方位に忠実に設計されている。それは、祠が南の方位に対しても強い方向性を元来からもっているからである。よって祠と併設するにあたり、集会所と祠は別の空間でありながらもどこか同じ共通意識を持ちながら併設している。

4-4. 中心壁(図3)

この集会所の中心に位置する壁はガラスブロックで出来ている。祠に来た人と、集会所に来た人と関わることは出来ない。しかしこの光を通すガラスブロックの壁がある事により、外と中の全く違う場所に存在しながらもお互いを感じる事が出来るという事を認識することができる。それは、この神母ノ木の敷地がこの規則できていることと比例して感じられる。

4-5. 集会所と祠の動線の違い(図4)

集会所と祠へ行く為の2種類に別けられた動線は、祠と集会所の空間を別物であると意識させる為、長いトンネルを計画した。しかし、途中何カ所か壁が途切れている箇所がある。そこは集会所にもアプローチが出来るようになっており、自由な動線計画となっている。

5. 今後の神母ノ木

今回の計画により、神母ノ木地区が再び「かみ」を中心とした地域の伝統や歴史に裏打ちされた精神的な深みを持つ、強い絆によって結ばれた地域の再生、創生をすることで、常にこの認識を忘れずに住民一人一人が神母ノ木を培っていくことができるものと思われる。

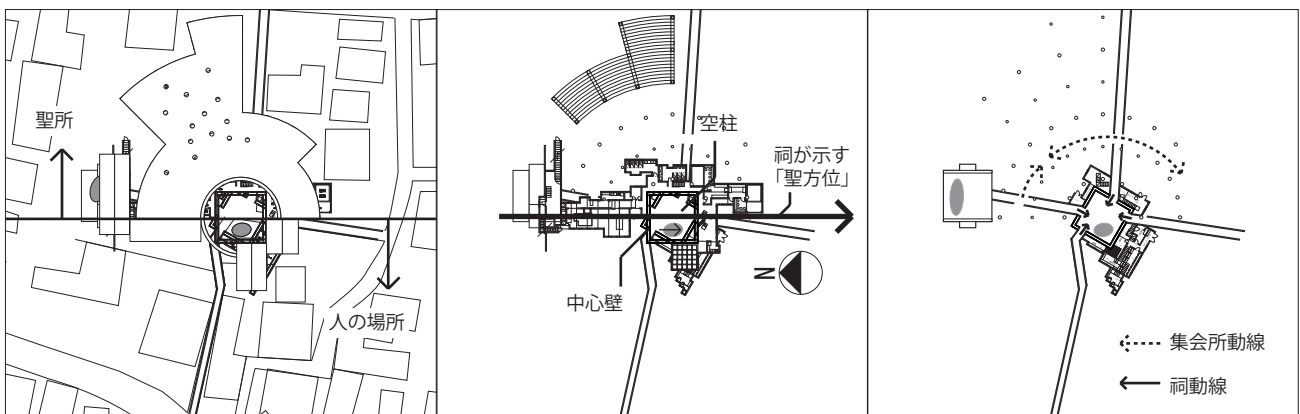


図2 配置図兼屋根伏せ図 s= 1/1,000

図3 2階平面図 s= 1/1,000

図4 1階平面図 s= 1/1,000